# 磐石の長谷寺

## ―一歩、踏み出す。

### 〈虚子に「写生」された初瀬〉

俳句文芸誌「ホトトギス」を主宰し、日本の俳壇に重きをなした高浜虚子は、同時に優れた小説家でもあった。同郷の先輩で俳人・正岡子規の教えを乞うたのも、元はと言えば志（こころざし）は小説にあって、発句の習熟が文章上達の近道と考えたからだ。「世人が子規門下の高弟として余を遇することは別に腹も立たなかったがそれほど嬉しいとも思わなか［った］」虚子は、致死の病魔に冒された子規から「後継者」と懇請されても「私（あし）には出来ない」と謝絶した。虚子が目指したのは俳人でも学者でもなく大文学者で、しかも「余の大文学者というのは大小説家」を意味していたのだ。明治35年（1902）に子規が没すると「束縛されておった縄が一時に弛んだ」かのように、虚子は俳句から離れ、小説に傾斜していく。

明治40年（1907）5月「ホトトギス」に掲載された『斑鳩物語』は、自ら提唱する「写生文」に優れ、小説家・虚子の代表作の一とされる。法隆寺門前の―実在した―老舗旅館「大黒屋」に宿泊した「余」が語る、お手伝いの「お道」と法起寺の若い僧侶との淡い―本当のところは「余」の「お道」への秘やかな―恋物語は、長らく多くの読者を魅了し、翌年には関西旅行中の志賀直哉・里見弴・木下利玄の3人が、そして30数年後も小説の構想を練る堀辰雄が―このころすでに老朽著しい―大黒

屋に投宿している。そして、どちらも『斑鳩物語』で「余」が通された―すなわち虚子が泊まった―「一番奥まつた中二階」の部屋から、虚子が写生した「大和一円が一目に見渡されるやうないゝ眺望」を追体験した。

『斑鳩物語』では、その部屋の階下の団体客が、翌朝「初瀬に行きやはるさうだす」と聞いた「余」が、「お道」と次のような会話を交わす。

「初瀬は遠いかい」〔…〕

「初瀬はナー、そらあのお山ナー、そら左の方の山の外れに木の茂つたとこがありますやろ……」〔…〕

「あこが三輪のお山で。初瀬はあのお山の向うわきになつてます。旦那はんまだ初瀬に行きやつた事おまへんか」

「いやちつとも知らないのだ。〔…〕」

この小説には斑鳩の里に咲く菜の花や梨の花、遠近に映る畝傍（火）山や多武峰、金剛山の景色、また大和絣（やまとかすり）を織る大和機（やまとばた）の筬（おさ）の音、さらに当時の「此辺の流行唄」なども、鮮烈に「写生」されている。しかし、自然や出来事をそのまま綴っただけでは小説にならない。「お道」にモデルはあったようだが、僧侶とのロマンスは仮構であった。語り手の「余」も「官命」で斑鳩を訪れたと書かれているから虚子本人ではあり得ない。ただ、初瀬を「ちつとも知らない」ことまでフィクションでは、「余」の目を通した、未だ見ぬ初瀬を「事実ありのまゝ」に写生はできない。『斑鳩物語』は明治38年（1905）の奈良旅行が下敷きになっているが、当時の虚子は初瀬を「ちつとも知らな［い］」ままだったに違いない。

## 〈長谷寺の「霊験」〉

虚子が確実に初瀬（長谷寺）を訪れたのは昭和18年（1943）年3月22日である。この日は、奈良出身の俳人・阿波野青畝らを帯同した長谷寺に吟行だった。

そのときの句が、長谷寺の仁王門脇の碑に刻まれている。

花の寺末寺一念三千寺

長谷寺は「花の御寺」にして、末寺3000寺を擁する真言宗豊山派総本山である。虚子はわずか漢字9文字 仮名1字でマクロの長谷寺を言い尽くしてしまった。

こちらはミクロの道をトリビアに進むことにしよう。

長谷寺は真冬でも黄色い蝋梅が咲いている。2月は梅や春黄金花（さんしゅゆ）、3月は木蓮の白い花、4月になると全山が桜の花に包まれて、長谷寺は文字通り「花の御寺」となる。山号の「豊山（ぶざん）」は、この花の豊かさをも表しているようだ。桜花が風に散り始めると、入れ替わるよう石楠花や藤の花、4月下旬からは牡丹が絢爛に咲き乱れる。「花の御寺」の長谷寺は、特に「牡丹の御寺」とも呼ばれる。大正13年の資料によれば、当時すでに「壱五〇種三千株」あり、その後も絶えることなく献木されて、今ではその数150種・7000株を超えると言う。

牡丹の寄進は、馬頭夫人（めずぶにん）に始まる。彼女は大唐帝国の第18代皇帝・僖宗（きそう）の后妃で、美貌の念願が叶ったお礼に「美」を象徴する牡丹を献納したのである。9世紀後半、すでに海の向こうの宮廷にも「初瀬の観音さま」の霊験は鳴り響いていたのだ。「花の御寺」の長谷寺は「人の御寺」でもあって、1年を通して―花よりも―参詣する人で溢れているが、それは今に始まったことではなかったのである。

神亀4年（727）に徳道上人（とくどうしょうにん）によって十一面観世音菩薩がお立ちになって以来、長谷寺は観音信仰の霊場となり、平安期になると長谷寺への参詣が貴族たちの間で盛んに行われ、やがて「初瀬詣で」として、一般庶民の人たちにも慕われるようになっていった。

平安期、末法辺土の衆生を自覚した都の貴族たちは、自らの救済と一族の繁栄を長谷寺に祈願した。その信仰と参詣の様子を、清少納言は『枕草子』で詳細に、夫・兼家の女性問題に悩まされた藤原道綱母（みちつなのはは）は『蜻蛉日記』で写実的に、その姪の菅原孝標女（たかすえのむすめ）は『更級日記』で印象的に、それぞれの「初瀬詣で」を通して表した。孝標女が少女時代に読み耽った『源氏物語』では、筑紫から長谷寺に詣でた玉鬘が、観音さまのご加護によってめでたく光源氏の養女となる。やがて庇護者のはずの光源氏まで美貌の玉鬘に恋心を抱いてしまい、事態は複雑に展開していくのだが、世阿弥の女婿・金春禅竹は、そのような王朝社会における1人の女性の苦悩を見事に舞台で活写した。

その能『玉鬘』が成立した室町時代、十一面観世音菩薩は「天照大神」の本地仏とされ、伊勢参宮とあいまって庶民の間にも「初瀬詣で」が広まっていくのである。

では、長谷寺の「信仰」の始まりは、奈良時代以降なのだろうか。

長谷寺では、神亀4年に観音像を刻まれた徳道上人を「開山」、その40年ほど前の朱鳥元年（686）、天武天皇のために「法華説相図」（国宝）を造顕された道明上人（どうみょうしょうにん）を「開創」と呼ばれている。

「法華説相図」とは、1メートル四方ほどの銅板で、「千仏多宝仏塔」とも呼ばれる。三重塔の周囲をたくさんの仏や菩薩が取り巻き、台座の下の方に縁起が鋳刻され、法華経の世界観が表されている。現在は奈良国立博物館に寄託されているが、寺伝の『長谷寺縁起文』によれば、もともとは西の山の手の方現在の五重塔あたりに納められていたという。

『長谷寺縁起文』は菅原道真の筆と伝えられ、書き出しに「吾遣唐大使中納言従三位〔…〕菅原朝臣道眞」、末尾に「寛平八季二月十日」とあって、「執筆」のところにも、冒頭と同じ道真の名が記されている。江戸後期の国学者・伴信友は、その真筆を疑い後世の仮託としたが、塙保己一の『群書類従』（巻第四百三十七）に収録されたものには「右長谷寺縁起傳云　天満宮眞蹟」と付記されている。

この縁起文は、現在の長谷寺の境内地を、大きく二つに分けている。

一つは「長谷寺」あるいは「後長谷寺（のちはせでら）」で、縁起文では「谷の東」と書かれ、現在十一面観世音菩薩像がお立ちになっている本堂の区域である。観音像は徳道上人の願いを藤原房前が元正天皇に奉じ、聖武帝の詔勅によって建立されたと書かれている。ここの谷が長いことが、「長谷」の名の由来とも記されている。

もう一つが「泊瀬寺」または「本長谷寺（もとはせでら）」と呼ばれる

もので、現在の観音堂の西側の岡のあたり、先述の五重塔が建っている地域で、そこに三重塔・石室・仏像等のあったことが記されている。パンフレットの長谷寺境内地図でも「本長谷寺」と載っている。

この「泊瀬寺」の記述のところに、天武天皇が勅を出し弘福寺の道明聖(上)人に命じて精舎を建てたこと、その金銅仏の下に天皇御筆の縁起があることが記されているのだ。

## 〈長谷寺＝観音信仰のセンター〉

長谷寺の本尊・十一面観世音菩薩は聖武帝の勅願で造立され、縁起文では「天平七季乙亥五月十六日上棟〔…〕同十九年丁亥九月二十八日奉供養」と書かれている。その開眼供養は、興福寺・元興寺・大安寺・薬師寺・法隆寺から100名の僧を得て、「導師天竺僧菩提聖人　咒願行基菩薩」により執り行われた。以降長谷寺は「鎮護国家之道場」に位置づけられることとなる。聖武帝自身も退位後の天平勝宝5年（753）、長谷寺に臨幸され「御自筆最勝王経一部并法花経一部」を「大聖御宝前」に奉納されている。

長谷寺と東大寺との詳しい関わりは分からないが、古くは東大寺の末に置かれていたらしい。10世紀末になると、長谷寺は興福寺の末寺となり栄えていく。戦国期に一時荒廃するが、大和守・豊臣秀長が寺領の寄進と伽藍を復興した。さらに兵火を避けて根来（紀州）から高野山に逃れていた妙音院専誉（せんにょ）僧正が入山すると、長谷寺に新義真言宗という新たな歴史が加わる。江戸期に入ると幕府の手厚い庇護のもとでさらなる繁栄を遂げ、現在の長谷寺に続いていく。

このような歴史的推移の中で、長谷寺への信仰も拡大の一途をたどる。それまでの霊場巡礼は、室町期に「西国三十三所（観音）」巡礼の旅となって、一般大衆にも普及していく。近世・近代には物見遊山の要素も多分に含みながら参詣の規模は拡大し、『斑鳩物語』で写生されたように、全国各地の祈りの歩みが長谷寺に向けられたのである。

長谷寺は、時を経るにつれて観音信仰センターとしての存在感と求心力を高めるのだが、そのセンターのさらに中核に位置するのが、唐の時代の馬頭夫人や平安期の著名な女性著述家も含め、誰もがご加護を求めて参拝した―現在も参拝人が途絶えない―「初瀬の観音さま」、すなわち長谷寺のご本尊・十一面観世音菩薩である。

## 〈「こもりく」の泊瀬〉

長谷（はせ）寺は初瀬（はせ）にあって、『万葉集』などでは泊瀬（はせ）と表記され、枕詞の「こもりく」にかけられる。この「長谷・初瀬・泊瀬・こもりく」の事情と十一面観世音菩薩造立の経緯（いきさつ）を、先の『長谷寺縁起文』を基礎に、直感的に整理したのが、白洲正子である。一般に「こもりく」は「隠国」と書き、山に囲まれ隠れて見えない場所とされるが、白洲はそれを否定し「神の籠もる国」だと言う。「ハセは泊瀬、初瀬、長谷とも書くが、いずれも正しい。それは瀬の泊（は）つる所であるとともに、はじまる所でもあり、長い谷を形づくってもいるからだ」と口を切り、要約すると、次のように続けている。

## 〈一歩踏み出す「覚悟」〉

現在の十一面観音は、白洲正子に「どんなに美事であったことか」と溜息をつかせた「二丈六尺の金色燦然たる天平彫刻」―現在の観音菩薩像は三丈三尺六寸―ではない。白洲が「一々書くのもわずらわしい」と嘆くほど、観音像はしばしば火災に見舞われた。しかし不思議にも「仏頂仏面」は焼けることなく、常に新しい本尊の体内に納められてきた。天文5年（1536）の火災では、本堂ばかりか全山ことごとく灰燼に帰したが、もちろんこのときも「仏頂仏面」は救われ、早くも翌々年に新造された像―現在の十一面観世音菩薩像―の体内に安置されている。観音様の霊験は、天平以来―永遠に―不滅なのである。

度重なる火災からの復興は、その都度長谷寺の僧が諸国を回る勧進によってなされてきた。国内に「長谷寺」という名の寺は100余り、有名なものだけで30近く存在するとされるが、その多くが、この奈良の初瀬の長谷寺に関係すると言われる。長谷への信仰の全国的波及は、長谷寺の僧たちの諸国行脚の証（あかし）でもあるのだ。西国三十三カ所の淵源も、長谷寺「開山」・徳道上人の事蹟（閻魔大王から33の宝印を授かって観音霊場をひろめるために甦生した）とも伝えられている。この伝説は、おそらく上人自らが諸国を巡って観音信仰を説かれたことに起因するのだろう。巡礼の旅のセンター創設者・徳道上人は、同時に、巡礼の旅そのものの創始者でもあったのだ。

この「自らが現地に出向く」という、長谷寺「伝統」の信仰スタイルは、何に学ばれたものなのか。

長谷寺の十一面観世音菩薩は、先述のように御身丈・三丈三尺六寸（約10メートル18センチ）の国内最大級の木造仏だが、さらに「長谷寺式」と呼ばれる異形のお姿をされている。左手の水瓶はふつうの観音さまと変わらないが、右手に錫杖（しゃくじょう）を持たれている。錫杖とは、修験者や遊行僧が行脚に携行するときの杖で、一般には地蔵菩薩の持物（じぶつ）である。

菩薩とは、本当は悟りを開くことができる段階に達しておられながら、あえて衆生を救うためにこの世にとどまってくださっている存在を意味する。

それぞれのお経などによって、地蔵菩薩・文殊菩薩・勢至菩薩・普賢菩薩など多くの菩薩がある。

その菩薩の中で、いわゆる『観音経』などで広く信仰とお祈りを集めているのが観世音菩薩である。『般若心経』では知恵の象徴となっている。重要なポイントの一つは、この世での願いをお聞きくださる「現世利益」の仏さまということだ。

やや乱暴に括ると、観音さまは衆生の救済のため―だけ―に存在し、その救済のスタイルも固定されたものではなく、衆生各々の性格や能力（「機根」）に応じて、その方法やかたちも千変万化に多様である。『観音経』によれば、観世音菩薩はあまねく衆生を救済するために、33の姿に変身される。あるいは真言の教えでは、生命は地獄道・餓鬼道・修羅道など6種類の世界に生まれ変わる「六道輪廻（ろくどうりんね）」の思想に基づき、聖観音・十一面観音・千手観音などの六観音が、六道のうち各々の持ち場の世界―例えば十一面観音は修羅道―に迷う衆生を救うとされる。

「三輪山の裾をまわって、桜井から初瀬川を溯り「冬のさなかにお参り」すれば、「『こもりく』の泊瀬と呼ばれたこの地方が、素顔を現すのはそういう時」だとわかる。なぜなら、初瀬川は古くは「神河」と言い、「おそらく長谷寺の元は、河上約半里の滝蔵山」で、いつの時代にか「神の岩座が転落し、その泊った所が『泊瀬』と呼ばれ」、大和全体をうるおす初瀬川も時として「荒れるおそろしい淵瀬」ともなった。「そういう所が神の在す聖地として崇められたのは当然」で、「『こもりく』は神の籠もる国を示したものに他なら〔ず〕、上代の斎宮も、伊勢へおもむく前に、ここに籠って、神聖な資格を得たので、そのことと切り離して『こもりく』という枕詞は考えられない。記紀万葉の歌人達が、『こもりくの泊瀬』という時、そこに清浄なおとめの姿を思い浮かべたに違いない」、と。

白洲はこのように言い、「長谷寺が造られ、十一面観音が鎮座するまでには、実に長い『こもりく』の歴史があった。いかに変化自在な観音といえども、伝統のないところに忽然と湧出するわけには行かな〔い〕」と声を張り、「岩の上に立ち、錫杖を持つ〔十一面〕観世音〔菩薩像〕が、天照大神の『御杖』となって、諸国を遍歴する斎宮の姿と重なったのは自然なこと」と言い切った。

白洲らしく事実と推量とを分明にしないまま結論づけられていくのだが、実は『長谷寺縁起文』を詳細まで読み解いた上での考量である。これ以上の引用は控えるが、徳道上人が長谷寺を建立し、十一面観音菩薩を造立した経緯も、正確に縁起文を反映して説明している。

従来の「こもりく＝隠国」論に違和感を持ったのは、白洲だけではない。大正14年（1925）4月、荻原井泉水は「初瀬〔…〕の舞台で今夜の月を眺めたい〔…〕と、ふと思付」いて長谷寺に夜参した。本堂の舞台に座り、円い月と量に「かつきりと嵌め込まれ〔た〕」直線的に構成される堂宇と「此の美しさを包んでなだらか曲線」を描く「山」との対比を愛でながら、山は「まことにこもりくといふ感じはよく適してゐる」と言いながら、「しかし〔左右から袖のようになっている〕山の二つは、かなり隔つてゐる」と観取した。「遠い方の山は月光を受けて、ほんのりと淡〔い〕」のに、「近い方の山は月光に背いてこんもりと濃い色に沈〔み〕、遠い方の「山と御堂のある山間の谷にある山との間の谷にも、まだ光はさして来〔なかった〕」のだ。この自由律の俳人にも「こもりく」は一つの連続的な山並みに囲まれた谷とは映らなかった。なお井泉水も「いづくかたともなく音楽が起り、花が降つて、観音の化身である美しい姿が舞ひ出て来さうな、ある恍惚とした心持に誘われ〔る〕」、と白洲に似た感慨に浸っている。

一方、地蔵菩薩は現世（人間界）にあって、苦悩する衆生を自ら行脚して救済する。錫杖はその行脚のための持物なのである。

つまり長谷寺の観音さまは、観音の徳に加えて、自ら人間界に出向いて苦悩する衆生を救うという、地蔵の徳をも併せ持っておられるのだ。あるいは現世利益の範疇を、衆生の苦しみや悩みを取り除くというところまで、うんと広げて捉えられているのかもしれない。

では、「観音」の意味は、現世利益を願う衆生の声をお聞き届けになること、声は「音」だから「観音さま」の観音とは、「音（声）を聞く」ということだろうか。いやどうして、そんな皮相なものではないようだ。

もちろん、声だから「聞く」としても、強（あなが）ち間違いではないだろうが、「聞」や「聴」でなく「観」である。「音を観察される」と理解した方が良いだろう。

ただ聞き届けるだけでなく、その奥をしっかりと見極めになる、衆生のいかなる「声」にも対応できるように観察される、観音とはそういう意味に捉えるべきだ。

そして、この長谷寺の観音菩薩は十一面観音で、３６０度全方向に視野が開かれている。どこから聞こえてくる「声」も観察されるのである。

さらに、一般に観音さまは蓮弁の台座におられるが、長谷の十一面観音は、山の頂上の磐石（ばんじゃく）の上に立っておられる。現世の衆生の「声」があれば、すぐさま救済できる準備が整っている。

いや、準備どころか、既に救済は始まっているのだ。このことは、月に夢中の井泉水はもとより、十一面観音にぞっこんの白洲正子も見逃してしまい、写生に長けた虚子の目からもすり抜けた。

長谷寺の十一面観世音菩薩は、造立から５００年近く経つ今も、なお金色に輝いている。ただ磐石にある足を除いて。巨大な観音さまに唯一触れ得るところが足。足に手を置いて、数え切れないくらいたくさんの人々が、観音さまに願いを込めてきた。一人ひとりの微かなワンタッチの積み重なりが、観音さまの御足を黒く変えたのである。しかし、祈りに没入する人たちも、触れるほど間近にいながら気付いていない、観音さまの右の足。その足は、

すでに一歩、踏み出している。

## 〈絶賛される初瀬（長谷寺）の光景〉

明治11年（1878）年、「美しき長谷寺！ 11月の雨にけむる筆舌を絶する美しさを、私は決して忘れない」と感動に身を震わせながら、しかしこの美しき「長谷寺は、月並みな散文では表現できない」と嘆息したのは、英国人女性旅行家のイザベラ・バードである。京都から奈良、三輪を経て伊勢神宮に向かう途上、「思いがけなく、外国人が訪れることのない」ところ（初瀬）で遭遇した、「自然の女神が、力の限りを尽くして、遙か彼方の島の美を、この神々しい谷に再現された」かのような光景に、圧倒されたのだった。後ろ髪引かれる思いで立ち去るバードは、「このとき、日本に来て初めて、名残惜しさを感じた」と記している。この年の約7か月にわたる彼女の日本旅行は、1880年『Unbeaten Tracks in Japan』（日本内地旅行記）としてロンドンで出版されたが、彼女はこの本の全編を通した最大・最高の賛辞を、初瀬（長谷寺）に捧げたのである。

奈良奉行・川路聖謨（かわじとしあきら）は、嘉永元年（1848）3月12日、100人余の供を引き連れ「吉野巡見」に出立した。その翌日早々に訪れたのが「初瀬てら」であった。川路は「こもりく〔…〕とて山を以包みたるかことときところ〔に、さらに〕観音を安置して堂塔多く建つらねたれは勝区絶景いうへくもあらす」で、これまで自分が見てきた中で「第一の勝地の寺也」と舌を巻き、細密な山水画に日本の桜を描いたようだと絶賛した。まさに鬼に金棒とはこのことだと褒め称え、一塵もなく掃き清められた境内に桜や桃の花びらが散るさまを、「仏のみちにていふならは天よりはなのふ［る］」ようで、「儒者風ならは仙境ともいふ」べきと、絶妙に表現してみせた。川路はまた、長谷寺の数々の宝物にも目を奪われるが、とりわけ絡繰（からく）り仕掛けの「鼠燈台（鼠の短檠（たんけい））」には強い関心を示し、鼠が油（このときは水）を吐く様子に見入っている。この川路が感動した「鼠燈台」は、あの―美貌の願いが叶ったお礼に牡丹を寄進した―馬頭夫人の献納品で、唐の皇帝・僖宗の作とされるものだ。寺僧から、水野越前守（忠邦）が京都で模作させようとしたが「出来さりし」と聞き、「いかにやありけむ」と得心している。

9世紀の唐の后妃、平安時代の女流作家を始めとするこの国の貴族たち、中世以降の武士や大衆、幕末の奈良奉行、近代初期の英国人女性旅行家、そして今日も霊験を求めて参詣する内外の人々……。長谷の観音さまは、時間や空間を超え、性別、年齢、言葉や信仰の違いも越えて、全ての衆生（人々）の祈りのセンターで在り続けている。何に惹かれて、人は長谷（初瀬）に向かうのか。誰も気付くことない、「一歩踏み出された右足」ではないか。いかなる衆生の、いかなる儚き声であれ、逃すことなく直ちに駆けつけ、ことごとく、これを救ってみせる。悟りを得て仏となり得る身でありながら、成仏を否定して、自ら衆生救済を唯一至上の使命と任じた菩薩。その利他そのものの菩薩という存在の極まりが、錫杖を手に、磐石からすでに足を浮かせている、長谷寺の十一面観世音菩薩なのである。

長谷の観音様に限らず、観音像は、概ねどちらかの足が前に出ているという。なぜ、そういう像形がとられているのかは、はっきりしないようだが、おそらくは救済に動き出そうとされている様子をかたちにしたのだろう。そうだとすれば、観音さまは、すでに私たちの音（声）を

「お聞き届け」になっていることになるが、―とりわけ、長谷の観音さまに限っては、蓮弁ではなく「磐石」、すなわちこの現世の岩の上の立っておられる。聖なるお堂の空間の中に留まっているのではないのだ。すでに、私たち衆生の側に来ておられる。十一面だから全方位、前後左右に一歩踏み出されている。我々がどこにいても、遍く、そこにおられるはずだ。なんとしてでも、この世の衆生の全てを救う、現世利益の観音さまの、現世に踏み出された、その「覚悟」の一歩に触れるために、我々は長谷寺に詣でるのである。

## 〈長谷寺の祈り〉

長谷寺には、観音さまの音に加えて、もう一つの「音（声）」がある。「声明（しょうみょう）」である。古代インドでは、5学問区分（「五明」）での文法学・音韻学だったが、中国に伝わって書体研究を含む悉曇（しったん）学となった。仏教とともに伝来すると、日本独自の発達を遂げ、やがて宗派ごとに固有の様式を持つ声楽に変容し、仏教儀式（法会）で僧侶が経文に節をつけて唱えるものを指すようになった。

とくに長谷寺の「豊山声明」は、空海が伝えた真言声明に忠実で、力強く減り張りのある華麗さから「声の芸術」とも評されている。長谷寺では、修正会・仏名会・仁王会・修二会・常楽会・御影会・伝法大会（論義）・伝法灌頂など、数多くの年中行事が執り行われるが、常にこれらの法会で声明が唱えられているのである。

実のところ、この日長谷寺にお邪魔したのも、仏名会での「声明」の写真に魅せられたからだった。この素晴らしい特別な祈りの姿の背後に何が控えているのか、その特別なものには、何か秘密があるように思えた。勢い込む当方の問いに、教務執事の伊東聖隆さんは、

ははあ。なるほど、たしかに法会や法要といったものは、「外に出る」ものですから、目立ってしまうのでしょうね……。

と当惑された。

お話の仏名会というのは、1月8日から10日までの3日間、仏さまのお名前をお一方ずつお読みする法会です。過去仏・現在仏・未来仏が各千仏と言いますから、合わせて3000の仏さまのお名前を読み上げる。長谷寺では、全ての読み上げに2年をかけますので、毎日500仏のお名を読んでお勤めをします。

この仏名会も、修二会と同じく「悔過」の法要です。いや

仏名会に限らず、法会・法要は、すべて「悔過」と考えていただいて良いと思います。

悔過とは「過ちを悔いる」ということですが、世間のルールや倫理に悖（もと）る行為を反省するというより、私どもはもっともっと広い意味で捉えています。普通に歩いていても、何かの命を足で踏みつけてしまうものですし、食事とは他の命を自分の体内に取り込んでしまうこと。したくて、しているわけではないけれど、そうしないでは生活できない。自分が生きていくために、何かが犠牲になっている。「悔過」とは、そのことを常に意識し、弁（わきま）えておくことから始まると考えています。言葉を変えれば「感謝」ということ。その気持ちを行為で表すと「修行」となる。少なくとも、私どもはそう考えて、お勤めさせていただいております。

われわれ僧侶の場合、日常のいつもが、そのような意味での悔過と修行の生活なのだと思います。法会は、ある特別な日・特別な名称で外に出て行きますから、「特別」に見えてしまうのでしょう。われわれとしては、1年365日、毎日毎夜「普通」に読経し、普通に勤行しているつもりでおります。

長谷寺は、普通の祈りの姿が、そっくりそのまま美しかったのだ。仏名会の写真は、ただ日常の「スナップ」に過ぎなかったのである。思わず、とても失礼な質問が口を突いた。何のために、この山奥で、これが「普通」といえる厳しい修行の日々を送っておられるのですか。

生きることに苦しむ人は、大勢いらっしゃいます。「仏さまは身近にいらっしゃいます」ということを、ご本尊の観音さまを通して伝えたい。その力をお授けいただけるよう、日夜お勤めしております。

長谷の観音さまの御右足を空に浮かせ、「覚悟」の一歩に踏み切らせたのは、ひたすら本尊に向けられる、創建以来の一途な僧侶たちの祈りである。

（了）

【Data】
・取材協力　長谷寺
奈良県桜井市初瀬七三一－一
TEL　０７４４（44）７００１
教務執事　伊東聖隆さん
〈２０１８年12月13日（木）〉

## ◎長谷の観音さまの母性。

一般に観音菩薩は、女性的イメージで語られることが少なくない。一方、観音菩薩のもととなったサンスクリットの「アヴァロキテシュヴァラ／Avalokitesvara」は、男性名詞である。

もちろん、観音の性別など問うても意味がない。観音菩薩は、救うべき衆生に合わせて―性別も―自在に変化するからだ。

さて、長谷寺の十一面観世音菩薩。その「化身」としての性別は、あえて言うなら女性だろう。『長谷寺霊験記』は、天平勝宝5年2月19日、長谷寺に行幸された聖武上皇の夢枕に、観音菩薩が立たれたと言い、次のように記している。

観音光ヲ十方ニ放チ。八大龍王八大童子等ノ眷属ニ引卒シテ。法皇ニ告テ云ク。濁世ノ猛キ衆生ヲ和ル事ハ。只女人なり。我レ此光ヲ和テ婦女ノ身ヲ現シテ。久シク末代ニ及テ国家ヲ護シ。衆生ヲ利サント思フ。

長谷の観音さまは、濁世（じょくせ）（乱れた世の中）の殺伐とした衆生を救えるのは女性だけだと、「女身」のかたちで出現されたのである。いまだ「濁世」は続いているから、今なお長谷の観音さまは女性に化身されたままに違いない。

ところで、なぜ女性なら「濁世ノ猛キ衆生」を救えるのか。『長谷寺霊験記』とは別のアングルからアプローチしてみよう。

本文の冒頭で引用した高浜虚子が、自らと子規との間柄に関わって、興味深いことを書いている。人の師となる上で不可欠の要素は「執着」だと言い、「或一人の寡婦はただ一人の男の子の放蕩を苦にし乍らもどうしても其を棄て去ることが出来ぬ」ことを例に引いて、次のように説明する。

寡婦は陰になり日南になりしてその子を暖き懐に抱きよせようとしてをる。其結果其の子は夙くに堕落し切つてしまふ筈のものがまだ兎も角其迄の深淵に陥らずに踏み止まつてをる。これは母の愛である。母の子に対する執着である。〔…〕曲がりなりにも尚ほ母一人子一人として互に頼り合つてゐることのできるのは其母の執着―愛―の力である。

虚子は、子規もこの寡婦と同じように、執着（愛）を持っていたと続け、

たとひ弟子〔…〕の方から逃れようとしても容易に其を逃しやしない。母の愛が子を抱きしめるやうに其一種の執着力はぢつと弟子〔…〕を抱きしめてゐて、縦ひもがき逃れようとしても容易に其を手離しはしない。さういふ点に於て子規居士は十二分の執着―愛―を持つていた。

観音菩薩は、慈母観音・悲母観音として語られることがある。「濁世ノ猛キ衆生」をも、漏れなくお救い下さる長谷の観音さまは、あるいは「母性」の化身なのかもしれない。

## ◎虚子の長谷吟行

戦後ほどなく「ホトトギス」創刊600号を記念して、虚子の『六百句』（菁柿堂、1947）が出版された。

その『六百句』に、昭和18年の長谷寺吟行のときの句が載っている。本文で引用した碑の

句の他に、2句、そのうちの一つが、

御胸に春の塵とや申すべき

虚子はご本尊・十一面観世音菩薩の胸のあたりに、なにやら「翳り」のようなものを見て――本堂にあるはずのない――「塵」とでも言うべきか、と表現した。

明治35年（1902）9月19日未明、子規の臨終に立ち会った弟子は虚子だけだった。いや正確に言うと、子規の死亡時刻は19日の午前1時、虚子は直前の0時ごろに病床を離れていた。虚子が座敷に移って眠ったか眠らぬかの間に、子規は絶命していた。虚子はとうとう子規の最期を看取れなかった。このわずかなギャップが、二人の間柄の微妙な距離感を象徴している。

子規の『病床六尺』の最後の記事が載ったのは、9月17日の新聞だった。ずっと前から子規の口述を弟子たちが交代で筆記していた。以下の9月14日の記事は、虚子の筆記である。

足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり大磐石の如し。〔…〕

その前日の13日、ぱんぱんに水の溜まった子規の足を動かぬように支えたのも虚子だった。仰臥した子規の右足を、左手で微動だにさせず支え続けた。手がちぎれそうになっても、離さなかった。手にも首筋にも顔にも「根岸名物」の蚊がとまったが、打つことも払うこともしなかった。手がほんのわずか動くだけで、子規の全身に激痛が走るからだ。そんな虚子に、能楽の「脇の修行が出来るよ。」と、死相そのままの子規は減らず口を叩いた。

虚子の長谷寺吟行は、子規が「大磐石のごとし」と自嘲した足を支えてから40年後である。そのころはもう、子規への追憶は薄れていただろうか。観音さまの「磐石」に浮かぶ「右足」を虚子は、写せていない。思わず上に逸らせた目に止まったのが、胸元の「翳り」ではなかったか。子規の直接の死因は脊椎カリエスだが、肺を冒した結核菌が脊椎を蝕んだのである。虚子は最初の発病で入院した子規の介抱に当たった。子規の発案で、なんとか喀血を止めようと、氷を直接肺部に押し当て続け、「胸」がひどい凍傷を起こした。若い医者は小細工を嗤って、こう言い捨てた。「出るだけ出して置けば止まる時に止まる。」子規はこの言葉が大いに気に入ったらしい。内には結核菌、外側には凍傷という胸の「翳り」を抱えながら、子規は病み衰えた顔に、会心の笑みを洩らしたという。

これ以後、再生の悦びに満ちた子規の顔を、虚子は見ることがなかった。虚子は致死の病を得た子規の期待と懇請を、最後まで拒否し続けた。それでも「升〔のぼ／子規〕は清〔きよ／虚子〕」さんが一番好きであった」と聞かされて、虚子は子規追憶の筆を止めた。

高浜虚子は『子規居士と余』を、次の言葉で閉じている。

余の生涯は要するに居士の好意を辜負（こふ）した生涯であったのであろう。

虚子が背いたという子規の好意とは、母が放蕩息子を思うような、子規の虚子への執着――愛――である。虚子にとって、胸の「翳り」を抱えた子規の会心の笑みは、母一人子一人が互に頼り合えた幸せな時代の、最後の笑みに写っていたのかもしれない。

（了）